

茶道の魅力に惹かれて

大成高等学校一年（東京都）

森田 琴音

高校に入学し、どの部活に入ろうか胸を躍らせていた。部活紹介を見ていると、他の部活とは違う雰囲気を感じて、凛とした姿で部活を紹介していた。

気になった私は、すぐに入部体験することに決めた。「難しいだろうなあ、色々な所作があつて大変だろうなあ」という気持ちがありつつも、それでも「やってみたい」という気持ちの方が強かった。ものすごく面倒くさがりな私にできるのか、という不安もあつたけど、とりあえずやってみることにした。

授業後、さっそく部室へと向かった。同じクラスの茶道に興味があると言っていた友人と一緒に部室へ入った。その場に足を踏み入れた瞬間、息を飲んだ。この空間だけ、

あきらかに雰囲気違った。とても神聖な雰囲気という言葉があつているように思えた。

先輩や先生に誘導され、さっそく入部体験することになった。先輩が一連の流れを見せてくれることになった。

私は真剣に先輩を見つめた。一つ一つの動作が美しく、無駄がないように見えた。一連の流れを見終わると、さつきとは打って変わった表情で私に説明してくれた。とても真剣だが、さっきのようなピリツとした空気はない。とても落ち着いた声で順を追って説明していた。さっきの先輩の雰囲気は強く惹かれた。とにかく美しかった。ただただ美しく、息をするのを忘れてしまうくらい、先輩の出す空気に呑み込まれた。

いつのまにか説明は全て終わり、私も流れを大まかに覚えていた。「いつか、私も先輩みたいになりたい」そう思った。

家に帰り、茶道に興味を持った私は、茶道について調べた。長い歴史があつたり、色々な所作があつたり、たくさん道具を使つたりしていることを知った。ものすごい膨大な量だったけど、私は夢中になって読んでいた。いつのまにか時間が経っていた。

次の日、私は茶道部に入ることを決めた。興味を持った、というのも理由の一つだが、先輩への憧れもあった。

「いつか、先輩みたいに」と思いつつ、茶道の所作を覚え

た。

体験期間が終わり、私はすぐに入部届を先生に提出した。

入部してすぐは、とても緊張していたけれど、先生や先輩がリードしてくださったおかげで、すぐに慣れることができた。

段々と私一人で一連の流れをできるようになっていた。

先輩にも上手と褒められて少し浮かれていた。そんな時、先輩の近くで先生がお茶を点でていた。先生の姿は真剣そのもので、あの時見た先輩の雰囲気を感じ出させる雰囲気を纏っていた。しばらくの間、先生に目を奪われていた。やはり、美しかった。

この時、「いつか私も人の目を奪えるくらい美しい所作ができるようになりたい」と思った。今の私はまだまだ未熟だけど、先生のようになれるまで、私が納得するまで茶道に向きあっていきたい、と強く思った。